

# おくのほそ道『立石寺（閑かさや）』定期テスト対策問題 | 現代語訳・俳句・文法の 頻出設問と解答

組 番 氏名

／100点

## 本文

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、〔①〕殊に清閑の地なり。一見すべきよし、人々のすすむるによつて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿借りおきて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年旧り、土石老いて〔②〕苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音聞こえず。〔③〕岸をめぐる岩を這ひて、仏閣を拝し、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。

〔④〕 閑かさや岩にしみ入る蟬の声

## 設問

- 「山形領に立石寺といふ山寺あり」の一文について、次の各問いに答えよ。
  - (1) 「いふ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書け。
  - (2) 「あり」の終止形（基本形）と、その品詞を答えよ。
- 「慈覚大師の開基にして」とは、どのような意味か。現代語訳せよ。
- 傍線部①「殊に清閑の地なり」について、次の各問いに答えよ。
  - (1) 「殊に」の意味を答えよ。
  - (2) 「清閑」の意味を答えよ。
  - (3) 「なり」の文法的意味（種類）を答えよ。
- 「一見すべきよし、人々のすすむるによつて」について、次の各問いに答えよ。
  - (1) 「すべき」に含まれる助動詞「べき」の意味を答えよ。
  - (2) 「一見すべきよし」とはどのような内容か、わかりやすく説明せよ。
- 次の傍線部の意味として適切なものを、それぞれあとから選べ。
  - (1) 「一見すべきよし」の「よし」  
ア 理由 イ 手段 ウ ～という事情・旨 エ 長所
  - (2) 「物の音聞こえず」の「ず」  
ア 打消 イ 過去 ウ 完了 エ 推量
- 「尾花沢よりとつて返し」とあるが、芭蕉たちはなぜわざわざ引き返して立石寺へ向かったのか。本文に即して説明せよ。
- 「日いまだ暮れず」を現代語訳せよ。また、この一文が本文中で果たしている役割を簡潔に述べよ。

8. 「麓の坊に宿借りおきて、山上の堂にのぼる」について、芭蕉たちの行動の順序がわかるように現代語訳せよ。
9. 「岩に巖を重ねて山とし」とは、どのような情景を表しているか。現代語訳をふまえて説明せよ。
10. 「松柏年旧り、土石老いて」について、次の各問いに答えよ。
- (1) 「年旧り」の読みをひらがなで書け。
  - (2) 「松柏年旧り、土石老いて」とは、この山寺がどのような場所であることを表しているか答えよ。
11. 傍線部②「苔滑らかに」について、次の各問いに答えよ。
- (1) 「滑らかに」は何という品詞の、どのような活用形か。
  - (2) ここで「苔滑らかに」と描かれていることから、この山寺の様子としてどのようなことが読み取れるか、簡潔に答えよ。
12. 「岩上の院々扉を閉ぢて、物の音聞こえず」とあるが、この描写は何を強調するためのものか。あとの発句との関係に触れて説明せよ。
13. 傍線部③「岸をめぐり岩を這ひて」を、現代語訳せよ。
14. 「仏閣を拜し」の「拜し」を、終止形（基本形）に直して書け。
15. 「佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ」について、次の各問いに答えよ。
- (1) 「佳景」の意味を答えよ。
  - (2) 「寂寞」の意味を答えよ。
  - (3) 「心澄みゆくのみおぼゆ」を現代語訳せよ。
16. 傍線部④の発句「閑さや岩にしみ入る蟬の声」について、次の各問いに答えよ。
- (1) この句の季語を抜き出し、その季節を答えよ。
  - (2) この句の切れ字を抜き出せ。
  - (3) 切れ字「や」は、ここでどのような働きをしているか答えよ。
  - (4) 「岩にしみ入る蟬の声」という表現には、どのような感覚的な工夫があるか。「聴覚」「視覚」などの語を用いて説明せよ。
  - (5) この句に込められた作者の心情として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。  
ア 蟬のやかましさにいらだつ気持ち イ 深い静寂のなかで心が澄みわたっていく感動 ウ 旅の疲れから早く宿へ帰りたい気持ち エ 山寺の荒廃を悲しむ気持ち
17. 本文には、音に関する表現が対照的に用いられている。「静けさ」を表す部分と「音」を表す部分を、本文中からそれぞれ一か所ずつ抜き出せ。
18. 『おくのほそ道』の作者を漢字で答えよ。また、その人物が大成した文芸のジャンルを何というか答えよ。
19. 『おくのほそ道』のように、旅の記録に俳句（発句）を交えて記した文章のジャンルを何というか。漢字で答えよ。

20. 『おくのほそ道』が成立したのは、おおよそどの時代か。次のア～エから一つ選べ。

ア 平安時代 イ 鎌倉時代 ウ 室町時代 エ 江戸時代

21. 芭蕉が立石寺を訪れたのは元禄二年のことである。この旅で芭蕉が同行者とともにめぐった地方として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 四国・九州地方 イ 東北・北陸地方 ウ 関西（畿内）地方 エ 関東南部の海沿い

22. この立石寺の段全体から読み取れる、作者がこの地で感じ取ったものはどのようなものか。「静寂」「澄む」などの語を用いて、四十字程度で説明せよ。